

南瓜栽培技術情報 No 3

平成 28 年 6 月 1 日

組 合 員 各 位

J A 営農支援課
特産南瓜生産組合

今後の管理について

1. 整枝・交配・摘果

- ・株元の雄花は非常に大切ですので取り除かないこと。
- ・親蔓 1 本仕立てとし、株元から着果節位までの側枝は全て取り除く。なお、くり大将においては着果数が多くても、肥料切れをおこなさなければ摘果する必要がないことから、草勢が弱い場合は追肥を行う。
- ・定植後、被覆資材を使用していない場合、強風により草勢が劣っていることから追肥を行い、草勢の回復を図る。(圃場で栽培する場合)

施肥形態	肥料名	使用量/10a	N 成分量/10a	備考
土壌灌注	尿素	5kg	2.3kg	灌注時間 3~5 秒
施肥(雨天時)	尿素	5kg	2.3kg	晴天時の散布は葉に肥料やけが生じる
葉上使用	尿素 20~50 倍液	2~5kg	0.9~2.3kg	水 1000 に尿素 2~5kg を混ぜて、葉上より散布する

※葉上散布は窒素成分が 10a 当たり 2kg を目安に散布する。

- ・一発肥料を施肥していない場合は着果する前に蔓先に施肥・耕起しておく効果的である。

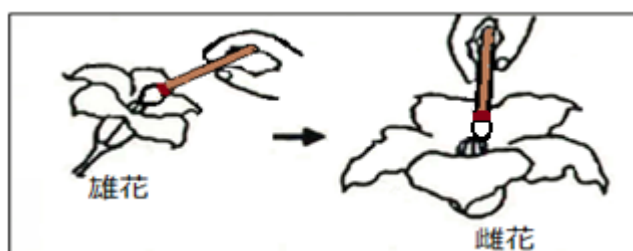
LP 苦土安 1 号 70 日タイプまたは燐硝安加里 1 号 S552

N成分 3 k g /10a 現物量 20 k g /10a

- ・一発肥料を施肥している人は生育状況を見て、必要であれば尿素(20 倍液~50 倍液)を葉上追肥する。夕方頃涼しくなってから散布する。
- ・着果節位は 10 葉以降で葉の直径が 30cm 程度であれば、着果させ、極端な奇形を除き摘果はしない。
- ・着果節位以降、親蔓は放任とする。草勢が強い場合は上位節の子蔓を 2~3 本程度残すか、下位節の子蔓を 2 葉程度残すなどして、草勢を調節する。

- ・交配はミツバチと共に、人工交配で行う。

[ホルモン剤での交配は絶対に行わないこと]
特に早い着果(6 月上旬)の場合、気温が低くミツバチの活動が鈍いことからミツバチ交配では不確実なため、一番果については人工交配を実施し、確実に着果させるようにする。人工交配を行う際は、花粉活性の良い早朝に行う(10~12℃が適温)。



※人工交配は絵の具の筆を使うとやりやすい。

- ・ミツバチでの交配は養蜂箱を設置し、取扱注意事項をよく読み使用すること。
 ※養蜂箱の設置申込みはJA 営農支援課まで

	種類	貸出期間
宮腰養蜂	大箱	2週間
	小箱	2週間
	使い捨て(女王蜂有)	使い捨て
	使い捨て(女王蜂無)	使い捨て
丸東 東海商事	ぶんぶん 1000 匹	使い捨て
	ぶんぶん 2000 匹	使い捨て

- ・着果後 10 日程度、又は果実がソフトボール程の大きさになったら果実の下に皿（トスコ F マット等）を敷く。

2. 病虫害防除

交配期以降は着果、肥大により草勢が弱まることや、梅雨時期等の影響から病害の発生率が高まるため、降雨の合間を見て、薬剤散布を実施する。

- ・アブラムシ対策

定期的に薬剤散布を行う。薬剤選択に際しては、ミツバチへの影響を考慮し、下記の薬剤にて防除する。

薬剤名	成分	使用量 (10a 当)	使用時期	本剤使用回数	成分使用回数	蜂への影響日数
モスピラン 水溶液	アセタミプリド	2000～ 4000 倍	収穫前日	2 回	2 回	2 日
マブリック 水和剤	フルバリネート	4000 倍	収穫 21 日前	2 回	2 回	4 日
マラソン 乳剤	マラソン	2000～ 3000 倍	収穫前日	5 回	5 回	10 日

※上記以外の薬剤を散布する場合には、ミツバチを撤去後散布する。

- ・病気対策

病気による被害予防のために、定期的に薬剤散布を行う。

農薬名	対象病害	希釈倍数 (倍)	10a 当り散布 液量及び薬液 (リットル・kg)	使用時期	使用回数	成分系態
ジマンダイセン 水和剤	べと病、 つる枯病、 炭疽病、疫病	600	100～300	収穫 21 日前 まで	2 回以内	有機硫黄
スミレックス 水和剤	菌核病	1000～ 2000	100～300	収穫 14 日前 まで	3 回以内	ジカルボキシ イミド
ダコニール 1000	べと病、 白斑病、 うどんこ病	1000	100～300	収穫 7 日前 まで	3 回以内	T P N
※リドミル銅 水和剤	疫病	800	100～300	収穫 14 日前 まで	3 回以内	塩基性 塩化銅

※基本的に銅剤は他の農薬とは混用できません。